

## 大井先生との30年

大 越 翼

あれは30年近くも前のことだったろうか。大井先生に初めてお目にかかったのは。先生は、当時伏見の公団住宅にお住まいだった。ほとんど全ての襖を取り払った、広々とした空間がそこにはあり、しかしそれは初めての私を緊張させない、とても居心地のいい暖かなものに包まれていた記憶がある。夕食には先生の大好物であるパスタが出され、フォークのみかスプーンをも使って食べることを覚えたのも、この日だった。何をお話ししたのかあまり具体的に覚えてはいないのだが、たぶん私が『考古学ジャーナル』に掲載された先生の論文を読んで感激したこと、私もメキシコへ行って勉強するつもりであることなどをお話したに違いない。先生は初学者とすら言えない私の言うことをよく聞いてくださり、もちろん偉ぶることなく、ご自分の経験などを冗談にくるんで笑わせつつ、本当の意味で勇気づけてくださった。これほど度量の大きな人と会うのは初めてだったから、帰りの新幹線の中で先生のお言葉を反すうしつつ、心温まる思いがしたのを今でも覚えている。

当時先生は『消された歴史を掘る』を執筆中であられたが、その次に出版された『ピラミッド神殿発掘記』とともに、両者には通底する二つの重要な考え方がありと私は思っている。一つは、現地主義ということだ。「メキシコの古代文化を勉強するならば、現地でこれを行わなければならない。それはまたメキシコへの礼儀でもある」と先生は何回もおっしゃった。当時も今も、アメリカにメソアメリカ研究をしに行くという選択肢は大変に魅力的なもので、彼の地で発表・出版される論文や研究書は膨大な数に上るし、米国人研究者と話していて、その知的訓練の行き届いているのには毎回驚かされる。しかし、先生はそれをもお認めになった上で、「大越君、たとえば日本の平安時代を研究したい人が、アメリカに行ってそれをやったらどうだろう」と質問された。ある文化を研究するにおいて、それを育んだ風土を肌で感じ、そこに住む人々と密接に関わっていくことは必要不可欠である。だが彼の地の人々を深く理解するには、短期間の滞在ではどうにもならない。長期間生活を共にしてこそ、そして彼らの全てを愛してこそ、初めて深い理解が生まれるのだ。メキシコで10年以上の歳月をお過ごしになった先生にしてみれば、これは自明のことなのであった。

もう一つは、学問における想像力に関連したことだ。それまでは、通常アメリカで出版された様々な研究書をもとに、ほとんどその紹介という形でのみ私たちは古代メキシコと対峙していた。むろん我が国においてこれが果たした役割は極めて大きいのだが、先生はもうそれではいけないとはっきりおっしゃった。そして、日本人がメキシコをはじめとする欧米の研究者に伍して、自らの手で発見した資料をもとに議論する時代が来たことを、その著書で明確に示されたのである。19世紀半ばから欧米の学者らによって蓄積された研究は一見侵し難く見えるが、「ナニたいしたことはない、まだまだやらねばならないことは沢山ある、大体メソアメリカの通史などは、調べてみるといい加減なものだ」そうも先生はおっしゃった。伺っているとひどく威勢のいいこれら

の言葉の本当の意味を理解するようになるには、私にはまだ10年以上の年月が必要だった。その時には、ただ単に「自分のデータ」を手にするのみに目を向けていたからだ。だが、データが指し示すものを仮説として組み立て、それを様々なケースに当てはめて検証するという作業は、よほど困難なものである。今になって思うのだが、そこには柔軟な想像・構想力が必要になるのだ。これがなければ、資料はほとんどなにも語ってはくれない。先生は、メキシコの生んだ偉大な考古学者ロマン・ピーニャ・チャン博士のもとで、おそらくはその点を体得されたに違いない。

想像力・構想力という点で、博士の存在は先生にとっては決定的だった。博士はカンペチェ州の生まれで、その点から言えばマヤ考古学のみに従事してもおかしくはなかったし、当時も今もそれが最も普通の道だった。だが、博士はほとんど全メソアメリカの遺跡を歩き回り、古典期後期から後古典期にかけて栄えた、テオティワカン、ショチカルコ、トゥーラ、カカシュトラなどの都市とマヤ地域との関連に関する壮大な仮説を軸に、メソアメリカ史を全く新しい視点からとらえ、その結果は何冊かの本として出版された。博士は、いかなるメソアメリカ文明も孤立して栄えたのではなく、相互に密接な関わりを持っていたから、これを研究の視座に据えておかねばならないこと、また複雑な過去の社会を復元するために、異なる分野の専門家たちと学際的な研究をすることの重要性を、その学生たちに身をもって教えられた。大井先生は、その一人だったのである。

メキシコ各地での発掘経験、ピーニャ・チャン博士との対話などを通じて得られた知識やデータをもとに先生が立てられた古代メキシコ史の概要は、『消された歴史を掘る』という本に具体的に示された。その内容は、日本で紹介されてきたメソアメリカ史とはよほど異なるものだったから、多くの人々はこれを消化することが出来なかった。これがおぼろげながらも理解され始めるのは、先生が『ピラミッド神殿発掘記』のなかで、自説をかみ砕いてご説明になり、さらにはグアテマラのカミナルフユ、エル・サルバドールのチャルチュアパ両遺跡での発掘、ミチョアカン展の主催などを通して、その有効性を実際に知らしめる努力をされてきたからにはほかならない。とりわけカミナルフユ、チャルチュアパ遺跡発掘では、ピーニャ・チャン博士の提唱した学際的な研究プロジェクトを実施され、そこから現在第一線で活躍している若手・中堅研究者たちが輩出されたことを忘れてはならない。

先生の仮説は、次の二つの点に集約されると思う。1) それまでの定説に言う「トゥーラを首都とするトルテカ帝国」の存在を否定し、トルテカの時代を古典期後期に位置づけ、メキシコ中央高原の古典期文化はオトミ系の人々のものであると断定した。そのうえでこの時代の具体的な文化内容を明らかにし、オトミの人々はコヨトラテルコ式土器を持っていて、古典期後期のメキシコ中央高原が文化的高揚期にあったとした。2) 後古典期をチチメカの時代とし、チチメカの侵入を前期と後期に分け、前期の人々はマサパ式土器を持った文明人だったことを明らかにした。後期（12世紀）にメキシコ盆地に侵入してきたのはアステカのような狩猟採集民であり、最初は既存都市の傭兵として文明化してゆき、ついには統一勢力として成長したとみなした。先生は、この図式がこれまで見えていなかったのは、先スペイン期に先住民王族の手によって歴史操作や改ざんが行われていたからであり、しかし逆にそれが史実を追求してゆく鍵を提供したのだと著書の中で述べておられる。

先生にとって、古代メキシコ史のこの枠組みは、文字通り枠組みでしかなかった。これには様々

なメソアメリカ地域の詳細な研究をもとにして肉付けをしていかねばならないという、途方もない課題が残されていた。したがって、これに沿った様々な現地調査がその後の先生を忙しく、しかし同時に知的興奮に満ちた研究生活を送らせることになった。グアテマラやエル・サルバドルでの調査はこの線上にあったのだし、その後私がご一緒することになったユカタンでの調査もその一つであった。

「マヤ遺跡は美しいのだが面白くない」そうおっしゃってマヤ好きの私を驚かせたのは、この頃だった。先生とチチェン・イツァーやエックバラムなどの遺跡を一緒に歩き、チチェン・イツァーでは結局10キロメートル近く歩き回り、しかしほとんど疲れもせずに実に素晴らしい体験をさせていただいた。先生から実地にこの都市がもつ歴史的意義をうかがい、様々な文化が交錯する場所としてのチチェン・イツァーを再認識させられた。なるほどエックバラムは美しいが、ただ「マヤ」それだけであり、文化的面白みに欠けるうらみがあるのは否めなかった。今では私も先生と同じことを学生に言っているから、この時の体験は私にとってはやはり強烈な、そして今となっては先生とご一緒した、忘れることの出来ない貴重な思い出となった。

これらの調査からお帰りになった先生にお会いした時、先生はご自分の仮説と符合する様々なデータを見つけることが出来たと楽しそうにお話になり、今まであの枠組みと矛盾したり、あるいはこれを否定するようなものを見い出すことがなかったとおっしゃられ、時の経つのも忘れて夜更けまで話し込まれるのが常だった。私は先生の仮説は熟知しているものの、話について行けなくなることがままあり、自分の不勉強を思い知らされることが多かった。

しかし、やはり先生の影響を受けていたのであろう。2009年3月プエブラのショチテカトル、カカシュトラ、 Choluleraなどの遺跡、サン・ミゲル・デル・ミラグロ教会を訪れて、これらの地で行われていた「水」を巡る先スペイン期の聖なる儀式が、植民地時代以降現在に至るまで継承されている事実を見て大いに驚かされた。またショチテカトル遺跡から眺める雄大な景色を前に、メキシコ湾とメキシコ盆地、プエブラ・トラスカラ盆地を結ぶ交通の要所にこれが築かれていることにも気づき、さらにはCholuleraが先スペイン期を通じて放棄されることがなかったことも考え合わせて、プエブラ・トラスカラ地域の歴史的な重要性を再認識させられた。メキシコ中央高原は常にメソアメリカ史の中核をなす地域であり、そこには無数の民族が関わっていた。それがこの地域の歴史の面白さだ。それを、先生と知り合って30年も経とうとしているこの頃、ようやく理解しはじめている。だから、この間先生のご家族を訪れた時、これはぜひ先生にお話しなければとごく自然に思い、当然この話をしたのだが、「今ごろになってようやくそれに気づいたのかい」という半ばからかいの、しかし暖かいいつもの言葉は聞こえてこず、先生のご意見を伺いたくとも、もうそれに答えて下さることはないという重い現実がのしかかってきた。荒涼とした風景のなかに一人で立たされているようで、寂しくて仕方がなかった。

最近メキシコ、日本をはじめとする各国の学会や大学などで研究発表を聞くたびに、ふと思うことがある。ここ10年ほどの間に専門化が急速に進んできたということだ。修士課程を2年、博士課程を3年で終えねばならないとしたら、当然学生の選ぶ研究テーマは年限内に仕上げることの出来る小さなものになる。かほど短い期間では、もっと大きなテーマへのアプローチは不可能だし、運よく研究職に就いても、3年から4年ごとに行われる業績審査や科研費のことを考慮し

た息の短い研究をしなければならない。またそうでなければ、厳しい競争に生き残ることすらおぼつかない。だから、ピーニャ・チャン博士がやられたような研究は、そしてその弟子であり博士の学統を継いだ大井先生のような仕事ができる人は、もう現れることはないだろう。現実には、広い視野を持つ壮大な研究をすることを難しくしてゆく方へむかっているのだ。実につまらぬ話ではないか。

メキシコが好きで好きで、豪快であると同時にとても繊細で、学生思いで、人一倍の努力家で、奥様やご息たちを心から愛しておられた先生。定年退職した後は、半年をメキシコ、残る半年を日本で過ごし、メキシコの仲間たちと一緒に好きな研究をするのだと目を子供のように輝かせながら話しておられた先生。そんな先生は、私にとって、30年前に伏見のお宅にお邪魔してから今まで、人間として、また研究者としてのあるべき姿を示し続けてこられた。私は、このような先生に男惚れしてしまったと言っている。いつか私も彼の地に行ったら、その時は先生とメキシコのあちこちを一緒に回ろうと思っている。そうまじめに考えさせるくらい、先生の存在は私にとって大きい。だから、幽明境を異にしたとはいえ、先生はすぐそこにいらっしやるようにしか思えず、それは今も変わらないのである。

●大井邦明教授の略歴と主な業績●

**略歴**

1944年生まれ。67年大阪市立大学文学部卒業。77年からメキシコ国立人類学歴史学研究所研究員として現地での発掘調査に従事。87年京都外国語大学助教授として着任し、90年に教授に就任。考古学、博物館学芸員課程関連科目、ラテンアメリカ文明史を担当する傍ら、1994年から京都外国語大学国際文化資料室室長を務めた。2009年1月逝去。

**著書**

- 『三世紀の考古学（上）』（共著）学生社 1980年
- 『消された歴史を掘る—メキシコ古代史の再構成—』平凡社 1985年
- 『ピラミッド神殿発掘記—メキシコ古代文明への誘い—』朝日新聞社 1985年
- 『ラテンアメリカ』（共著）朝日新聞社 1992年
- 『カミナルフユ』（編著）たばこと塩の博物館 1995年
- 『文化遺産の保存と環境』（共著）朝倉書店 1995年
- 『古代王権の誕生Ⅱ』（共著）角川書店 2003年

**発掘調査**

- テオテナンゴ遺跡（メキシコ）の考古学的調査（1971-75年）
- ティンガンバト遺跡（メキシコ）の考古学的調査（1978-79年）
- カミナルフユ遺跡（グアテマラ）の考古学的調査（1991-94年）
- チャルチュアパ遺跡（エルサルバドル）の考古学的調査（1995-2000年）



